

現代フランスにおける中世哲学関係の 二大ルヴュー編集長へのインタビュー報告

宮本久雄

1 *Revue des Sciences Philosophiques et Théologiques* (RSPT), revue trimestrielle publiée avec le concours du Centre National de la Recherche Scientifique et du Centre National du Livre (PARIS, Librairie Philosophique J. Vrin).

今回パリで RSPT の編集長 Gilles Berceville 氏へ本雑誌とそれをめぐるフランスの思想状況に関してインタビューを行った。以下はその要約である。

本雑誌の歴史的誕生は 1907 年頃にさかのぼり、その頃は新スコラ主義（ルーヴェン大学中心のトマスの思索の現代への復興運動）に継ぐ新トマス主義の隆盛期であり様々なルヴューが誕生したという。RSPT はパリ・ドミニコ会の神学校ソルシュワールの雑誌で、M.-D.シュニュなどに指導されていた。その主要な編集方針は一方では近代主義的傾向に対決しそれを克服しようという試みであり、他方でトマスの歴史的哲学的研究に心血を注ごうとするものであった。

70 年代に入り RSPT はドミニコ会の手を離れて現在は非ドミニコ会系の雑誌となっている。

その内容や性格について次にふれてみよう。第一に 2 つの顕著な特徴が看取される。その一つは「他の雑誌に対する簡単な書評」(recension des Revues) である。そこでとりあげられるルヴューは、仏語圏のみならず、英、独、伊などの諸言語圏のものが含まれ、50 冊位に及んでいる。そこでその中からいく冊かをざっと挙示してみよう。Angelicum, BIJDRAGEN, Études Philosophiques, ISTINA, Kerygma und Dogma, Mediaeval Studies, Revue de Droit Canonique, Revue des Études Augustiniennes, Revue Philosophiques de Louvain, Revue Thomiste などである。そうするとジャンルのにも書評は、神学、哲学、宗教哲学、中世学、典礼学、聖書学、法学などの広い領域をカバーしていることが解る。

2 番目の特徴は「要約的解説」(Bulletin) である。試みに 2001 年 85 巻の J. Greisch の「宗教哲学の要約的解説」(529-65 頁) をとり上げてみよう。彼は P. リクールの哲学や宗教思想を継承して次代を担う宗教哲学者としてすでに著作も多い。彼の要約の内容はここで詳細に紹介できないので、せめてそこにあがる人名だけを列挙すると、十字架のヨハネ、M. シェーラー、ブルンナー、バルト、カント、K. ラーナー、リクール、デュルタイ、W. ジェイムス、ユング、Ch. ティラー、ハイデガー、A. ラコック、など多数にわたる。

この RSPT の第二の性格および内容は「対決・挑戦のルヴュー」として示される。それは中世哲学やキリスト教思想を現代哲学の問題状況において新しい哲学的ヴィジョンを披こうとする試みであるといえる。特にフランスでは現象学の影響が強いので、そこから J.-L. マリオンやレヴィナス、P. リクールなどの思想家が生まれたわけである。しかし現代では結局哲学や神学の領域にあって支配的な学派もなく、トマス研究自体も依然として歴史研究のレヴェルにとどまっている状態である。またフランスの国立大学の哲学科はトミズムやキリスト教哲学に十分自己開放していない。そこで RSPT としては、一方で神学と哲学を橋わたしして自ら媒介となって両領域を活性化し止揚しようという意気込みに燃えており、他方ではトミズムの学的思索 (réflexion universitaire) の質を高めてゆこうという方位をとる。

フランスのトマス研究に関してここで付言させていただきたい。それはフランス革命以降、大学の哲学教育と教会の研究所 (例えばイエズス会やドミニコ会の研究所) の間には余り交流がないということである。大学では所謂デカルト主義や構造主義、ドイツの現象学あるいは精神科学などが教えられているのに対し、教会の研究所ではキリスト教神学や哲学などの教育が主流となっているわけである。その中で中世哲学研究は、E. ジルソンやアラン・ド・リベラの例が示すように哲学的歴史研究のレヴェルでは大学に受容され教授されている。しかしトマス神学や哲学それ自体は「公認」されてはいない。そうしたフランス思想界の状況にあって RSPT は、トマス研究を現代の哲学的潮流に対決させつつ本格的な哲学として立ち上がることを希望しているといえる。2001 年 85 巻の 374 頁に、フランスにおける西田幾多郎研究の書物が、*Le jeu de l'individuel et de l'universel* という副題を件って紹介されているのも、その希望の反映とでもいうべきだろうか。

2 *Revue Thomiste*, revue doctorinale de Théologie et de Philosophie (École de Théologie Toulouse).

Revue Thomiste (以下 RT と記す) の編集長 S.-T. Bonino 氏にインタビューしたのはトゥールーズのドミニコ会トマス研究所の一室においてであった。この研究所が置かれている敷地にはかつてバルクソンの弟子でありかつトマス哲学の大家にして靈性家の J.マリタンが晩年を過ごした。彼はしかしここで哲学者として研究に精進したわけではなく、シャルル・ド・フーコーの理想に学ぶ「小さき兄弟会」の 1 人の小さき兄弟 (Petit Frère) としてナザレのイエスの祈りと貧しさに生きたことは周知のことである。この道も他の哲学領域に見出せない中世哲学の一つの可能性なのである。

さてインタビューはやはり RT の根本的性格づけに向けられた。Bonino 氏によるとそれは、トマスとトマス主義の学説的視点によって性格づけられているという。その研究活動を成す二つの軸は次のようなものである。

第一の軸はトマスの学説的あるいは歴史的研究である。第二の軸はトマス学説の基本的原理と現代哲学との対話・議論である。この対話・議論のプロセスを通して相互の思索が照らし照らされるという関係が生まれてくることが望ましい。

以上二つの軸に即して RT は書評を行うわけだから単なる著作の内容紹介には了らない。ここで 2002 年の T. C II-N°2 の RT においてなされた Bonino 氏の書評を簡単にとり上げてみよう。第 1 にテキスト批判・翻訳・注解がとりあげられる。例えば、2000 年に刊行されたレオニーナ版 *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis* に対する批判がなされる。第 2 項は論文の批評である。第 3 の形而上学の項では、次の書が批評されている。

J. F. Wippel, *The Metaphysical Thought of Thomas Aquinas, From Finite Being to Uncreated Being*, 《Monographs of the Society for Medieval and Renaissance Philosophy, 1》, The Catholic University of America Press, 2000.

第 4 は、人間学の項で次の著作が書評をうけている。J. Obi Oguejiofor, *The Philosophical Significance of Immortality in Thomas Aquinas*, Lanham-New York-Oxford, University Press of America, 2001.

第 5 項は神学に関係し、今回は次の著作の批評がなされている。C. Leget, *Living with God*, Thomas Aquinas on the Relation between Life on Earth and 《Life》

after Death, 《Publications of the Thomas Instituut te Utrecht, NS 5》, Leuven, Peeters, 1997.

以上から推察されるように、RT はトマスの思索が含むテキスト、神学、形而上学、哲学的人間論、エチカなどの多彩な次元を現代的文脈の中で展開してみせている。

RT の根本的性格の次にはその企画に関して質問が向けられた。Bonino 氏によると RT はやはりトマスをめぐる2年毎にコロキウム（シンポジウムや国際会議）を開催する。例えば、H. de Lubac のトマス解釈に対して「超自然」をテーマにしたり、神学的テーマ「祭司」をとりあげたり、あるいは「真理概念」について討論するのである。特に「真理概念」は新プラント主義的な神的アイデアとの連関で考察される。というのも、トマスにおける *esse* と *essentia* の区別に基づいて、*essentia* が可知性さらにアイデア性に連関してゆくからである。そうするとギリシア教父研究にも深く踏み込まざるをえないという。

最後に話題となったことは、現代のような多元主義的で異文化交流が盛んな時代においてどのような視点で時代と向きあうかというテーマであった。RT は基本的に形而上学的な戦略・問題設定を通して異文化と対話する。例えばマッキンタイアーナしたように、人間存在を土台にして幸福や徳をテーマ化し深める基本的人間論 (*La morale fondamentale*) の洞察と研究が対話的視点となりうる。そこには多元的文化において真理は一つというトマスの姿勢が読みとれるのである。

さて先述したようにフランスでは大学における中世研究と神学哲学研究所の研究は異なっている。前者では中世学、中世史学、中世哲学史が研究されている。そこで Bonino 氏が RT を編集しながらトマス学を講ずる研究所の性格が問われる。その問いに対して、トゥールーズのトマス研究所ではトマスを根源的に神学者として遇するのだという。その態度はルーヴァン学派におけるネオ・トミズムのトマス・アプローチとも異なるといえる。それが一方でプロテスタント神学や正教神学とどのような対話の空間を披きうるのか、他方で人類の宗教的伝承（ヒンドゥー教、イスラム教、仏教など）の神〈論〉とどのような共通の場を見出せるのか、地球化的レヴェルで考えると大変な課題がつきつけられてくるように思われる。Bonino 氏との会見を終りかけて J. マリタンが滞在したという静寂な林の空間を再び目にしながら、彼はなるほどフランスの大学の研究現場には受け容れられなかったが、トロントやプリンストンという北米の新開拓地で神秘主義的形而上学、芸術論、政治社会論などのレヴェルで

トマス学を展開したことを想起したのである。それは20世紀の欧米キリスト教文化世界における出来事であった。われわれは21世紀の文明の衝突と和解が複雑に交錯し流動化する時代にあってどのようにトマスと共に自らを展開するのだろうか。